

2018年SOTO禅インターナショナル 総会のお知らせ

日程／2018年2月5日(月)
15時より 定例総会

会場／檀信徒会館 菊の間

17時より懇親会を開催いたします。

【詳細は参加者に後日お知らせいたします】

※出席のお申込みは、メールまたは電話・FAXで下記までお願いします。

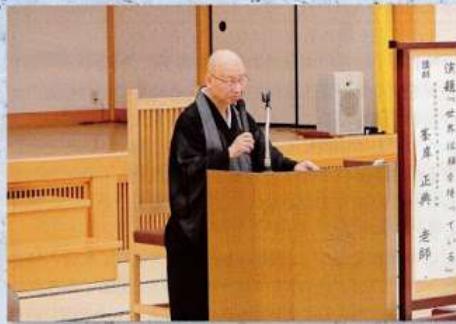
【問い合わせ先】SZI事務局 浅井宣亮 jizoji@ma.medias.ne.jp
TEL/FAX 0562-44-4936 (留守番電話の場合は、メッセージをお残し下さい。)

CONTENTS

► 卷頭	さらなる発展を目指すもの	宗務庁教化部長 山本 健善	2
► 特集1	両大本山ワークショップ抄録 世界は禅を待っている	宗教間対話研究所所長・群馬県長楽寺住職 峯岸 正典	3
► 特別寄稿	「第31回 平和の祈りの集い」(9月10~12日)に参加して	宗教間対話研究所所長・群馬県長楽寺住職 峯岸 正典	10
► 特集2	ヨーロッパ国際布教50周年 ヨーロッパ国際布教50周年記念行事参加報告 ヨーロッパ国際布教50周年記念慶讃法要ツアーに参加して	新潟県興源寺徒弟 佐藤 慧真 秋田県満藏寺副住職 黒木 淳祐 愛知学院大学教養部講師・宮城県城園寺副住職 普原 研州	11 13 14
► 海外レポート	(1)北アメリカ国際布教総監部における現職研修会に出席して (2)南米国際布教師辞任後の報告 (3)北米研修報告 ④ドイツ普門寺を訪ねて	富山県明禪寺住職 佐藤 鴻舟 長野県梅翁院徒弟 大澤 香有 新潟県興源寺徒弟 佐藤 慧真	15 17 20
► 国内レポート	大恩の師 旅立ち一追悼 初代SOTO禅インターナショナル会長 松永然道老師～	愛知県宝珠寺住職 永井 成典	21
► SZI主催	2016年第2回海外徒弟(子弟)研修会 in ハワイ報告	山形県清龍寺副住職 大山 健治	22
► SZI express	会費納入者・贊助金納入者名簿		26
► 国内ニュース	英語翻訳版『伝光錄』出版記念シンポジウムに参加／動静報告／本の紹介		27
► SOTO禅インターナショナル総会のお知らせ			28



発行日 2017年12月7日
発行人 田宮隆児
編集担当 佐藤慧真
発行所 SOTO禅インターナショナル事務局
〒474-0052 愛知県大府市長草町本郷40 地蔵寺内
TEL/FAX 0562-44-4936
地蔵寺 TEL 0562-46-1963
URL <http://www.soto-zen.net/>



両大本山ワークショップ講師の峯岸正典老師
演題は「世界は禅を待っている」



特集「ヨーロッパ国際布教50周年」より
ヨーロッパ国際布教50周年慶讃法要の様子



大澤香有師の「北米研修報告」より
工事の進む天平山禅堂の様子



佐藤鴻舟師による国際布教師辞任後の報告
写真は佐藤師とブラジルの禅源寺参禪会の皆さん



昨年度の海外徒弟(子弟)研修報告より、ハワイ別院正法寺
にて駒形宗彦総監、引率の大山健治師と子どもたち



ドイツ普門寺訪問レポート
ファミリー揃いで五觀の偈を唱える参加者たち

巻頭

さらなる発展が目指すもの

宗務庁 教化部長 山本 健 善 (長野県桃源院住職)



本会設立の目的の一つは、いよいよまでもなく宗門内側に対して国際布教の重大さを示し、宗門人の意識改革を目指すものであったといえる。この24年間の歩みを振り返ると、その活動は縦横に進展し、また様々な障壁も乗り越え、以前には見られなかった足跡を残してきている。情報の共有、国際交流はもとより、両大本山でのワークショップは留学僧の派遣へと繋がっており、海外子弟研修は若い世代へ新しい発見のチャンスをもたらしている。

アメリカに曹洞宗国際センターが設立されたのは、今から20年前の1997年であった。海外で初めてというべき積極的な布教組織が創設されたのである。センターにおいては、各地各組織との連携を図りながらその目的を目指してはいるが、世界は広く未だ十分なる体制とは言い難い側面もある。しかしながら、その活動の日本サイドの受け皿としての組織は、本会がその中心となって担うべきであろう。

Preface

Taking a Step Further, Beyond this Destination

The Reverend Kenzen Yamamoto,

Director of Education and Dissemination Division
Soto Zen Buddhism Administrative Headquarters

The original founding goals of our organization, Soto Zen International, was to change the whole perspective of the international propagation of Soto Zen Buddhism. Looking back at the past twenty-four years since its founding, we have made tremendous progress, overcoming barriers, and have done things that have never been done before. We have come a long way in our sharing of information across different countries and strengthening our international exchange program; where the workshops of both Eiheiji and Sojiji Head Temples that SZI organizes have led to programs which allow monks in training to go abroad to experience and study at temples and Zen centers around the world. Moreover, the recently established Minister's Children Workshop that is held abroad has given the younger Buddhist generation opportunities to expand their worldview and a chance for new discoveries.

It was 20 years ago in 1997, that the Soto Zen International Center was established in the United States. It is most likely the first time that a center dedicated in spreading the Soto Zen Buddhist teaching has been established outside of Japan. The main purpose of the center was to serve as the connecting point between temples, Zen centers and organizations all around the world. However, as the world is far-stretched, the center is still far from accomplishing all of its goals yet.

Putting things in perspective, I believe that SZI should serve as the Japanese counterpart of the Soto Zen International Center and assist in connecting all of the different organizations in the world. This endeavor is not only comprised of management and personnel, but also largely depends on the support of entire communities.

Today, Zen centers, places where people can learn and practice Zen meditation, continues to develop resulting in the increase of many Zen practitioners. In the midst of this trend, I believe that the universality and inclusiveness of Zen makes this movement possible. Moreover, the Zen movement that had first entered the U.S. from Japan has returned to Japan in its American form, not just as a boom, but as a growing presence seen in the wide use of the word "ZEN." We have also seen an increasing number of people who seek to live a simple Zen-like way of life.

Following this movement, I believe that it is SZI's mission to approach and support those people who have sincere interest in Zen. In three years, the Olympics and Paralympics will be hosted in Tokyo City, and there will be a lot of people that will travel to Japan from all around the world. I believe that some of the visitors will have interest in Zen and for that reason; our organization, as well as all of us who are a part of Soto Zen and anyone who share the same Zen aspirations, should come together and make a unified effort to accommodate the people who are in search of the Zen experience.

特集1 両大本山ワークショップ抄録

[平成29年9月6日(水)於 大本山總持寺 / 9月7日(木)於 大本山永平寺]

世界は禅を待っている

講師 峯岸 正典 (宗教間対話研究所所長・群馬県長楽寺住職)

講師プロフィール

上智大学を卒業後、愛媛県瑞應寺専門僧堂にて修行。

ミュンヘン大学留学、また聖オッティリエン大修道院において、ベネディクト会修道生活を体験。

大本山永平寺国際部講師、曹洞宗特派布教師を歴任。

現在、宗教間対話研究所所長として毎月開催される研究会を主催。国内外において精力的に坐禅指導、講演活動を行っている。

動があり、ベトナム戦争に対して反戦の勢いが高まって来て大学では権威に反抗する学生たちが紛争を起こした時代がありました。既存の伝統文化に対する反発をカウンターカルチャーといいます。そういう背景から新しいものが求められ、仏教が入っていく余地が出来ました。髪がやたらと長くてジーンズにTシャツというラフなスタイルが印象に残っていますが、伝統とか制度、規制にしばられず自然な生活への回帰を目標とし、ピートルズを代表とするロックミュージックを好んだ彼らのことをヒッピーといいました。そしてロックが人気になるのに並行して、東洋文化、日本文化、仏教、禅への関心も広まっていったのです。

その頃サンフランシスコに桑港寺という日系人のためのお寺があり、日本から鈴木俊隆老師という方が住職として渡っていました。桑港寺では日系人たちが自分たちの先祖や亡くなったために法事や葬式をしていましたが、そこに坐禅を求めて白人の人が大勢集まって来たのです。日系人が神妙な気持ちでお寺に行くと、どこの誰だか分からない人たちがたむろしている。なんだん緊張感が生まれてきたので、では坐禅を求めて来た人たちは違うところで学んでもらいましょうと分けたのが、そもそもサンフランシスコ禅センターの出発点となったと聞いております。

ところで、こうして欧米の人たちが坐禅に強く関心を持つようになるには、その前提がありました。明治26年、シカゴで万国宗教会議が開かれ、日本から臨済宗の釈宗演老師とか何人かお坊さんが参加されました。当時、キリスト教と科学の間に若干緊張関係がありました。特にダーウィンが「生物は進化する。人間も進化の

世界に広がる曹洞禅

さて、現在ヨーロッパには曹洞宗公認のお寺が41ヶ寺、約400人のお坊さんがいます。北米には51ヶ寺、南米に11ヶ寺、ハワイに11ヶ寺、オーストラリアに2ヶ寺、シンガポール・スリランカに各1ヶ寺あります。お手元の寺院名簿のデータは7年前の資料を基にしていますので少し内容が古いのですが、海外に曹洞宗のお寺が増えているのです。そこで、初期の海外寺院は、そもそも日本から渡っていった移民のためのお寺であったということを押さえておきたいと思います。

アメリカでは1960年代に人種差別に対する公民権運動



大本山總持寺監院寮拌問

結果である。」と言ったので、神が人間を造ったとする伝統的なキリスト教の考え方と合わなくなってしまった。それに対して仏教は因果、原因があつて結果があるのだという立場を取り、科学と正面から矛盾しないという所から、ポール・ケーラスはじめ一部の人たちに高く評価されました。そうしたことがきっかけとなって鈴木大拙という人がアメリカに渡るようになりました。鈴木大拙は鎌倉で参禅して非常に深いところまで禅を知っていました。アメリカやヨーロッパで執筆や講演を行い、禅というものが素晴らしいものだと種まきをしていったのです。だから60年代以前に既に欧米の宗教的伝統に懐疑的な知識人たちは、禅のことを知っていました。ところが実際にそれを教える人がいなかったのです。そして鈴木俊隆老師がアメリカで禅の指導を始め、またちょっと後になりますが弟子丸泰仙老師という方がヨーロッパに渡り、禅を教え始めました。その後勢いを持って広がり、今では禅という言葉が国際語として定着するほどになっています。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の神は同じ神

さて、なぜ欧米人が禅に魅かれるのか、これからさらにご案内したいと思いますが、その前にまず一神教の伝統についてお話をさせていただきます。

神様がモーセという人に自分の思いを託したことを受け、モーセが「神様はこういう風に思っていらっしゃる」ということを伝えて始まった宗教をユダヤ教といいます。そのユダヤ教を信じる人たちがいわゆるユダヤ人です。時代が下がってユダヤ教徒だったイエスという人に、改めて神様が自分の思いを託した、それを伝えて始まったのがキリスト教です。さらに時代が下がって神様が自分の思いをムハンマドに託し、そこから始まったのがイスラーム(イスラム教)です。これらはみな同じ神様を尊崇しているということです。

ユダヤ教の人たちはいわゆる旧約聖書を「旧約」とは思っていません。しかしキリスト教の人たちはユダヤ教で神様が人間にした約束がイエスにおいて果たされたということで、それは神様と人間の間の新しい約束であるから新約聖書といい、その立場からユダヤ教の聖書を旧約聖書といいます。つまり、苦しんでいる人たちに救い主を送ると旧約聖書で約束された、その救世主がイエスであったということ、それを信じる人がキリスト教徒なのです。ちなみにキリストとは救世主という意味の言葉です。そこで問題が出てくるわけです。ユダヤ教とイスラム教には反発があって、というのも、神様は神聖にして侵さざるものであるのに対して、人間はトイレにも行くし間違いも犯す。それなのに、イ

エスが神様であったということは神様を冒涜することである、というのが彼らの立場です。

ちなみにイスラム教の人たちがなぜあんなに元気かというと、ムハンマドが神様に託したメッセージが最新にして最後のものであり、それを自分たちが忠実に伝えて来たと思っているからです。一方キリスト教では、おそらくは自分たちの伝統が特別であり、あとは全て二義的なことだと思っているわけです。そして世界でテロが起きていますが、ある学者の見方によると、見えないキリスト教中心主義に反発しているのではないかということあります。

そういうキリスト教の世界で育ってきた人たちが、禅に憧れて来ています。以前、アメリカで長く布教されておられた片桐大忍老師という方にお尋ねしたことがあります。「欧米で禅に入ってくる人はユダヤ人が多く、ユダヤ人は欧米社会では差別されている人たちです。それから、ユダヤ人とはまた別に体制社会についていけない落ちこぼれが大勢入っている、というような話を聞きますけれども、どうなのでしょうか?」と伺いました。そうしたら「ユダヤ人の話は、聞いてみると確かに非常に複雑な背景を持っている。それからもちろん体制社会についていけない落ちこぼれの人たちも禅に来る。だけれども、差別されているようなユダヤ人、または誰にもとともに相手にされないような落ちこぼれを、自分たちが救わないで一体だれが救うのだ!」という愛語をいただきました。

カトリックの修道院で修行

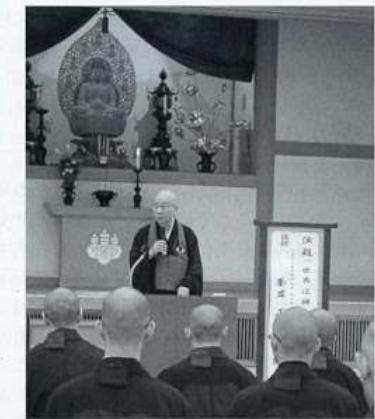
さて、縁あって私はカトリックの修道院に勉強に行っていたことがあります。修道士という人たちは3つの誓いを立てた人たちです。一つは院長に対する「服従」です。院長に「アフリカに布教に行きなさい。」と言われた人は、一遍は断ることが出来ますけれども、2回目は断れません。それから二番目は「清貧」。余分な所有物を持たないこと。禅の場合でも学人は師家に従うというのは当然のことありますし、「三衣一鉢」という立場と重ね合わせられます。三番目は「貞潔」。これは独身を保つ。性的な接触から離れる。江戸時代まで曹洞宗のお坊さんも独身でおられました。私がお世話になつたところはベネディクト会でしたけれども、ベネディクト会ではその3つの誓いの上に4番目の誓いを立てています。それは死ぬまでこの修道院を離れない「定住」ということです。これは『弁道話』で出てくるように「不離叢林」という私たちの理想と同じです。だから臨済宗の禅文化研究所にいらした古賀英彦先生は、「ヨーロッパの修道院に行くと禅の故郷に帰つて來

たような気がする。服従・清貧・貞潔・定住。自分の心が明るくなった。」とおっしゃっておられました。

また修道院には二つ種類があります。観想修道院は神様にずっと祈っているところで、もう一つは活動修道院です。そこは社会的に学校を作つて教育をしたり、あるいは出版活動をしたり、人々の心を耕していくます。私が伺つたのは観想修道院でしたが、一日がどういう一日だったかというと、4時ちょっと前に最初の振鈴がなります。5時ちょっと過ぎから朝の祈りが始まります。30~40分続けると自分の部屋に戻つて個人で聖書を読んだりベネディクト会の会則を読んだりお祈りを続けます。そして30分経つたらまた教会に戻つてミサがあります。ミサが終わると朝食です。個々人で食堂に行き、自分の席で自由に食べます。ビュッフェスタイルで、コーヒーとパンとバターとジャム。はちみつを食べてもよいとされていました。7時半ぐらいから作務です。そのあと12時15分から昼の祈り、12時半から食事。私たちと違うのは食事の時に当番がいて、これは大切だという文書を朗読することです。昔は字の読みない修道士もいたので、そういう人たちのために読んだということのようです。僧堂でもそうですが、修道院の食事のスピードは比較的早く1時頃には終わります。1時半からまた作務。6時15分から夕方の祈り。その間おやつは自由に食べてよく、食堂にパンとバターとジャムそれからコーヒーとリンゴから作つたりシング酒があり、それも飲んでいいことになつてきました。そして夕方の祈りが終わると7時から夕食。7時半からレクリエーションといつていました。部屋で話をしたり散歩したり。原則として修道院の中では沈黙が保たれていないわけいけないのですが、その時間は話をしてもよく、そしてまた8時になると夜の祈りが始まりまして、30分ぐらい経つと終わります。夜の祈りが終わると朝の祈りが始まるまで沈黙を保たなければいけ

聖オッティリエン大修道院の一日常 (峯岸老師在院の頃)

3時55分	振鈴
5時15分	朝の祈り、終わって自室で祈り
6時15分	ミサ、終了後朝食
7時半頃	作務開始
12時15分	昼の祈り
12時半	昼食
13時20分	作務開始
18時15分	夕方の祈り
19時	夕食、20時まで自由
20時	夜の祈り
20時半	朝まで沈黙



大本山總持寺

ません。それで朝の祈りは「神様、私の唇を開いてください。あなたを賛美することが出来ますように。」という言葉で始まります。

修道院と僧堂の生活は基本的に似ているのですが、特によく似ているなと思うのは、自分たちは間違ったことをする、その間違ったことを許してくださいというお祈りの中で、「ドルヒマイネ シュルド」と3回唱えるのですが、その時に額と口のあたりと胸のところで小さく十字を切ります。身口意の三業という言葉を思い出しました。

そういう生活を2年ほどさせていただきながら、あわせてミュンヘン大学の神学部で少しキリスト教の成り立ちを勉強させていただいたわけです。

ちなみに修道士というのは二つに分かれます。今のローマ教皇フランチェスコはイエズス会ですが、このイエズス会では4番目のお誓いとしてローマ教皇に対する忠誠を誓います。そして修道士になりたいといつてもすぐになれるわけではない。なりたいと言つてきた人はまずは志願者として受け入れられます。そしてその立ち居振る舞い、生活の仕方を観察されながら、一年間だけ修道士としてみんなと一緒に生活をするというお誓いを立ててもらいます。各修道院で年月は別々ですが、1年経つてさらに修道士として生きたいという場合、今度は4年間のお誓いを立てます。その時に選挙があります。修道士たちが志願者を今後も共同体の中に受け入れていくかどうかを選挙で決め、OKが出たら4年間修道士として生活することが出来ます。そして4年経つと今度は死ぬまで修道士として生きるというお誓いを立てることになります。これを「終生誓願」といい、このお誓いを立てるときには儀式の中で床に腹ばいになつて誓願をたてます。これは神様に対して自分は絶

対に忠誠を誓うという気持ちを形に表しているということかと思います。終生誓願を立てたら修道士をやめではないことになっています。

東洋に魅かれるキリスト者

もともと在家の人たちがきちんと生きる生活の場を作りましょうということで始まり、そこからミサをあげるのに神父さんが必要となり、神父さんを養成するようになって、神父さんと一緒に修行する場が出来ていったというのが修道院の起りです。そこに修道院の人たちが禅に憧れる一つの理由があります。それは「坐禅が修道生活を深め、続けていくことの支えとなる」ということです。禅と修道院の交流を非常に熱心にやって来られて、本人も坐禅を実践して来ているある神父さんがこう言っておられました。

「自分は聖書なしには生きられない。だけれども坐禅をして年月を重ねていく中で自分は確かに変わった。昔は一つのことを一つの角度からしか見られなかっただけで、坐禅を深めていく中でいろいろな角度から複合的に見て取ることが出来るようになった。」

私はその話を伺って、彼らとの交流をもっと深めていても良いと思い、それなら伝えるべきことをちゃんと伝えようと思ったのです。伝えるときに、相手のことが本当に分かっていないときちゃんと伝えられません。だから相手の心の歴史を見て取って、この人の質問はああこういう背景があるから出てくるのだなあということを受け止めた上で伝えるとキチンと伝わります。ということで、ヨーロッパの人たちの心の歴史を勉強してきたわけです。

最近は浄土真宗で伝えられている内観法や、上座部仏教のヴィッパーサナ瞑想をよく勉強し指導して

いる神父さんもいます。要するに東洋的なものを自分たちの中に受け入れて、今のキリスト者として生きる生き方を、より深めていくことが出来るならば、それはいいことだ、という立場なのだと推察しています。そしてその中の一つの大きな山として禅もあるのだと受け止めています。

禅の魅力とは何か

ではその禅の魅力はどこにあるのか。一つは身体でもって心を整えること「身心一如」。頭でいくら勉強しても禅にはならない。身体を通じて身体をもってはじめて得られるところがある。仏教の伝統はそこから外れていないわけですけれども、禅はその典型です。

もう一つは、これを信じなければ坐禅をやってはいけない、というのが、はじめには出て来ないこと。身体があればだれでも坐禅ができる。坐禅を深めれば必ず何かの境涯に到達する。そういう普遍性があり、人間を差別しない、坐禅をつとめればそこに一寸の仏が誕生する、そういう立場ですから、頭の出来のいい悪いは関係ない。そういうところに引き寄せられていくのだと思います。

さらに身体を使って心を整えるということに関連して、曹洞宗には最も洗練された法要と坐禅がある。「威儀即仏法 作法是宗旨」という言葉があります。その人のあり方がすなわち仏法であると。そして作法というのは形のない眞実を形に表すこと。そういうところが歐米の人たちの伝統にはないところなので、関心を持たれるのだと思います。

最近やっとアメリカで進化論を信じる人が50パーセントを超えたという報告があります。キリスト教と科学というのはなかなか調和するのが難しいところがあ



大本山永平寺

ります。イエスは処女マリアから生まれたし、亡くなつて三日後に復活して生き返ったということを信じなくてはいけないのです。その点、仏教は因果律ですから、原因があって結果がある。原因というのは無限にさかのぼれる。無始無終ですから、そういうところが今の科学的、合理的考え方とぶつからない。

もっと言えば、その禅を伝えるときに、一緒に過ごさなければならぬということ。習うという字は羽という字に白と書く。これは親鳥がひなに対して羽ばたき方を教えるのに、一生懸命羽を動かすのだけれども、その羽の付け根が白いのだそうです。親がやつて見せないと子どもは習えない。僧堂という所は先輩が後輩に対してこうやってやるんだよとやってみせて繋がっていくという面がある。人と人の交わりの中でしか禅は伝わらないのです(面授)。お釈迦様が摩訶迦葉尊者に伝えられた「拈華微笑」の話も、相対してはじめて成立する話なのです。三国伝統歴代仏祖がみんな相対して法を伝えられてきた。だから僧堂というのは貴いのです。

大乗佛教の根幹の一つは法華経と言われていますけれども、その法華経の心を分かりやすく集約したのが宮沢賢治の「世界全体が幸福にならぬうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉です。これは大乗菩薩の願いであります。それを分かりやすく説明するのが平和の「和」という字です。ノギヘンは穂の束をさし、それに口がついている。穂の束を独占しないでみんなで分かち合って食べましょうというのが和の字の元です。修行というのは「和合衆」という言葉がありますけれど、その和を体得出来るところなのです。一緒に波立たないように共に生活を支え合っていくのが修行ということだそうです。狭いところでみんなが一緒に修行すると摩擦熱が起きてぶつかりますけれども、その中でそれが磨かれていく。そういう意味で道場というのは芋を洗う場とも言われて來ました。

一日でも長く僧堂で坐禅を

サンフランシスコ禅センターは今世界中で一番組織としてしっかりしていると言われていますが、その出発点のころ、鈴木俊隆老師は「無所得無所悟の坐禅」ということをずっと説き続けました。坐禅をしたいという人の中に、坐禅をして悟りを開いてスーパーマンになりたいというような気持で来る人がいる。そうすると坐禅が本物にならない。自分が背負っているものを一枚一枚はがしていく、そして素になってどんどん自分が磨くなる、明るくなる、開かれていくということが宗教ということですから、何かを得て何かを背負って強くなろうというのは間違います。そう間違う人が

出ないように、「坐禅をやっても何にもならないよ」と言い続けたそうです。でもあんまり言われるとそれもまあ聞き飽きてくるのでしょうか。ある時「いつも無所得無所悟の坐禅とおしゃっておられますかが、その意味は分かりましたが、一回ぐらい坐禅をやると何かいいことがあるとおしゃっていただけませんか」と言われて老師はしばらく腕を組み、「そうだな、坐禅を続いているとここ一番というときに最善の行動がとれるようになるな」とおしゃったそうです。それならもっと坐禅をやろうということになって、さらに皆さんの弁道が深まつたのだと伺っております。

『宝鏡記』の中に、「いわゆる仏祖の坐禅とは、初發心より一切諸仏の法を集めんことを願ふがゆゑに、坐禅の中において衆生を忘れず、衆生を捨てず、ないし昆蟲にも常に慈悲をたまひ、誓って済度せんことを願い、あらゆる功德を一切廻向するなり」とあります。曹洞宗の坐禅は、みんなに寄り添う坐禅であります。皆さんにお唱えする偈文の中にも必ず「当願衆生」という言葉が入るのはその所以であります。どうか一日でも長く僧堂で坐禅を続けて、大勢の人が日本という枠を超えて坐禅によって救われたいという時代の中で、皆さんお一人お一人がその本領を發揮して下さいるように、切に祈願をして終わりにしたいと思います。なぜなら三室の中の仏も法も時代や場所が違っても変わるものではない。ただ僧侶だけが力を持つか持たないかが違いを作っていく。どうかそういう点におきまして、皆様におかれましては自分たちの立場の大切さをかみ締めて、日々充実させていただきたいと念願いたしました。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

Q. なぜカトリック修道院で修行したのですか?

A. 1979年の第1回東西靈性交流に参加したとき、修道院の生活を素晴らしいと思ったのです。また、お年寄りの修道士が生活する場所があつて面倒を見ている若い修道士がいて、不離叢林が実現出来ている、禅の理想が生きている組織だと思ったのです。

Q. カトリック修道院では、禅宗のお坊さんとして修行したのですか?

A. 修道院では衣で過ごし、ミサに出るときはお袈裟を付けていました。すべての行事に参加することが許されていましたが、ミサの中でキリストの体に代わるとされるパンと、キリストの血に代わるとされる葡萄酒をいただくことを避けるということを守っていました。

修行僧の感想（抜粋）

() 内は、出身地と上山年度

【大本山總持寺】

■まず曹洞禅というものが世界にここまで浸透しているとは思わなかった。海外の人が禅文化に興味を持つのはただ坐禅、精進料理などの日本風の文化に魅かれているのだと思っていた。しかし今回の講演を聞き、海外でボビュラーな宗教であるキリスト教、ユダヤ教、イスラム教といった宗教とは本質的なところが違うのだと気付かされた。信仰のあり方を考えるいい機会になった。
(北海道・29年)

■飲米の人が禅に興味を持つ背景が分かってよかった。日本人とは異なる歴史、思想が禅への憧憬を生み出していることが興味深かった。印象に残ったのは、修行生活を「芋洗い」にたとえた話です。そうした「こすれ合い」や「ぶつかり合い」を避けたがる人もいるように感じますが、やはり同安居の中でもそれを多くしていた人の方が見習いたいと思える行動をしています。まず自分からそうした一皮むけた修行僧にならなければいけないと感じました。
(京都府・29年)

■他宗派であったり他宗教であったり、曹洞宗以外にも目を向けることや学ぶことは視野を広げる意味でも重要だと思います。また外を見ることにより気付かずに流していた所に気付けたりということもあると思います。今後も修行し、勉強していくことを改めて感じました。
(北海道・29年)

■仏教に関するのみではなく、キリスト教のことや宮沢賢治の言葉なども使われていて、とても興味深いお話ばかりでした。自分自身まだまだ禅に関する知識や魅力がいまいち分かっていないので、今後の修行はより一層気合を入れていかなくてはと思いました。(愛知県・29年)

【大本山永平寺】

■私が興味を持っている、今一番欲しい話が聞けました。とても聞きやすく海外の禅に興味が持てた。師匠も海外の修道院に行ったことがあると話していたので、今回話を聞いたようなことをしていたんだなと思った。海外での話、向こうの人の考え方、取り組み等はとても今の私たちの視野を広げることのできる素晴らしい話です。さらには失敗や裏話を聞けたらと思いました。
(福岡県・27年)

■世界の宗教背景をふまえての今の世界においての佛教を開けたのは、今までなかったのでとてもために

■現在の曹洞宗は日本国内だけでもかなり大きな組織となっているのに対し、海外へと布教の幅を広める行動力はすごいことだと感じた。文化の違う世界に坐禅や僧堂を広め、また現地の人々に理解してもらうまで大変な苦労があったと考えると、世界のZENはそう簡単に言い表せないと感じた。
(福島県・27年)

■私は以前から海外の貧困について考えてきました。そして今仏道修行に励んでおります。禅、仏道を貧困に繋げたいと考えましたが、宗教をいきなり持ち込むことが良いことなのかという問題もありました。しかし今日の講演で仏道は一つの神を信じるという強制的なものを持たない、誰でも日常の中で出来る修行だと分かり布教という意味ではなく、教育として仏道修行の意味をいろいろ海外の人に伝えたいと思いました。
(愛知県・29年)

■世界の宗教には「これを信じなければならない」という掟があるのに対し、禅はそうではなく、身体で心を調べるものであり、そのような伝統が西洋にはないというお話をから、世界に禅が通じているということに納得を得ることが出来ました。
(東京都・29年)

■海外に曹洞宗寺院が多くあるのは知っていましたが、具体的なリストを見て、その数と地域の広さを再認識することが出来ました。また、最後に話していた修道会との違いといった話はとても興味深かったです。
(三重県・29年)

■日本だけに広まるのではなく、海外に目を向けグローバル化したからこそ曹洞宗は良くなっていくのだと思われる。これからの海外寺院の道を見ていくたいと思った。
(岩手県・29年)

なるものでした。
(千葉県・27年)

■修道院の生活と禅の理想形が一致しているところがあり、興味深かった。
(山梨県・29年)

■現地で慣れ親しんだ物の考え方方が私たちと異なる事を念頭に置き、修道院等考え方はえども同じく精進した生活を送っている場と積極的に交流を図る必要があると感じました。自分は海外布教等に興味がなかったのですが、今回の講演を聞き、少しでも海外に目を向けていく必要性を感じました。
(福島県・29年)

■修道士の修道院での生活が永平寺の修行の差定とともに似ていて驚いた。修道院の方が積極的に坐禅を取り入れているとあったが、逆に修道院から僧堂の修行に取り入れられるものはあったのか興味を持てた。
(愛知県・29年)

■一つの宗教では崇拜対象でありながら他では良くないものとされる。良いものと悪いものの基準、考え方をお互いの宗教観をきちんと理解し受け入れることで、よき関係、未来を築いていかなければと思いました。
(山口県・27年)

■キリスト教、仏教、教えが違う二つの宗教に共通点があること、また違う宗教を実体験することも宗教者として経験値になるし、貴重な体験であると思いました。「相手の人の心の歴史を読み取ること」。互いに認め合うことの難しさや、分かり合えたときの価値観や絆といったものが宗教の枠を超えて、今の社会にも通じることだと思いました。
(山口県・29年)

■仏教僧として教会のミサ等に参加するという発想はなかったのですごいと思った。また、教会側もそれを受け入れているというのが、それぞれの宗教がお互いの思想を尊重しているようで感動した。
(三重県・29年)

■講師の先生が教会で実際に生活をされて、そこが高齢の方のケアを含めて、「不離叢林」を実現しているという点が興味深いと思った。
(青森県・28年)

■僧侶の活動の一つでもある布教活動は今後の自分にとってあまり関係のないものと思っていたが、現在どういった活動をして禅や曹洞宗がどのように受け入れられているのかを知ることは、今後の自分にも影響するものだと感じました。
(千葉県・29年)

■他の宗教での生活をすることで違いに気付いて曹洞宗に生かしたり、同じ所を見つけ励みとする。そのような姿勢が全仏教徒にあるべきと感じました。また宗教に関係なく坐禅が出来るという点は、現在読んでいた「禅マインドビギナーズマインド」に書かれていた事とつながり、興味深かった。無所得の坐禅をしなければならないが、スーパーマンになりたいと外国人が言ったという話は、日本でも勘違いしているもしくはどこかでそういう気持ちを持っている人が多いであろうと思い、それは違うとしっかり説明できるだけの力は身につけなければならないと感じました。
(鳥取県・26年)

■禅宗のお坊さんが修道院で生活するのは良いと思いました。私もベルギーのオーパル修道院で滞在したことがあります、良い経験になりました。布教といって無理に広めようとしなくとも日本の中で淡々とすべきことをしておけば、自然と広がっていくと思います。キ

リスト教やイスラム教の世界に仏教が入り込もうとしないでよいと思います。
(京都府・28年)

■修道院でも曹洞宗の僧侶が修行があると知ったが、イスラム等の他宗とは同様の交流があつたりするのだろうかと思った。修道院での生活において、ほとんどの修行は同じようにしてもよいが、キリストを表すパンとワインは駄目というは新鲜だった。
(山口県・27年)

■外国で仏教を学んで来た方はいますが、そのような地で他宗教の修行の話は聞いていてみな新鮮でした。自分の信仰している宗教をより深く知るためににはそのようなことも必要なかもしれませんと思いました。
(青森県・28年)

■最後の三宝のうち、僧宝のみが不变ではないという話が非常に印象的でした。考えてみれば当然のことですが意識したことありませんでした。現実問題として自分自身を含めすべての僧侶が一生僧堂で暮らすのは困難でしょうが、自坊に戻るにしても和合僧の一員という自覚が肝要だろうと感じました。また世界中に草の根的に広がっていく禅の力強さに感動する一方で依然大多数の無関心な人々、禅を選ばない人々の声ももっと聞いてみたいと思いました。
(静岡県・29年)

■禅は一神教とは確かに違い、信じなければいけないという絶対のものではなく、比較的寛容な宗教であると思っています。だからこそ他宗教の者が禅に興味を持ったり禅の世界に足を踏み入れる、もしくは禅の信仰者が他宗教に踏み入ることが出来るのだと思います。ここまで多くの人々に浸透している背景には禅の精神が普くすべての人間において、あるべき姿や人として当たり前のことを示しているからではないだろうかと思います。今後まだ続く修行の中で答えを出していけたらと思っています。
(鳥取県・28年)

■曹洞宗から坐禅の専門家がいなくなったら曹洞宗は曹洞宗でなくなるという言葉を聞いて、自分は正直坐禅が苦手であるが少しでも好きになろうと努力しようと思った。「身心一如」身体を使い坐禅をして心を整える宗教であることを忘れないようにする。
(新潟県・29年)

■「僧堂生活はお坊さんの花の時代」という言葉が非常に心に残った。僧堂での集団生活はつらいものがあるが、狭い中の集団生活は「芋を洗う場」として、自分自身を磨いていく場所であり、自坊に戻っては出来なくなってしまう。現在行っているこの僧堂生活は貴重な時間を過ごしているということを再認識させられる言葉であった。
(福島県・29年)

《特別寄稿》

「第31回 平和の祈りの集い」(9月10~12日)に参加して

みね さし しょう てん
峯 岸 正 典 (宗教間対話研究所所長・群馬県長楽寺住職)

ヨハネ・パウロ2世が発願し1986年にアシジで開催された「平和の祈りの集い」は、世界中の宗教者を招いての行持でした。曹洞宗からも井上哲也老師(当時、大本山永平寺単頭)が参加されました。ローマに本部を置くカトリックの聖エジディオ共同体は、そのアシジでの心を受けて、翌年から毎年ヨーロッパ各地で同様の「祈りの集い」を開いてきました。今回はドイツ北部のミュンスターとオスナブリュックで行われました。

本年はマルテン・ルターを契機とする宗教改革が始まって500周年という節目の年です。したがって、宗教改革に端を発する宗教戦争(三十年戦争)の終結をもたらした、ウエストファリア条約締結の地、ミュンスターとオスナブリュックの両都市で開催されるということは、宗教の融和を象徴する意味もあったと思われます。三十年戦争の和議が結ばれる間、ミュンスターにはフランスが陣取り、オスナブリュックにはスエーデンが居を構えていました。両都市は60キロメートルくらいの距離がありますが、その方がドイツ諸侯にはメリットがあったようです。

聖エジディオ共同体が主催する「平和の祈りの集い」は開会式、各パネルでのスピーチ、閉会式(各宗教別の法要と平和への祈願)の三つに分かれています。筆者は24あるパネルの一つで「宗教は非暴力を自らに問う」というセクションで発表をいたしました。要旨は「非暴力への回帰を訴える前に、それぞれの宗教が自分の立場を数ある宗教の中の一つと認める必要があるのではないか。自分以外の他者、および他のそれぞれの宗教の立場を丸ごと明確に認める必要がある。さもないと宗教が異なるということに起因するかと思われる争いを防ぐことがむずかしい」というものです。くわえて「詩編(旧約聖書)の34-15では「悪を避け善を行ひ、平和を尋ね求め、



開会式で講演するドイツのメルケル首相

追い求めよ」と表現されているが、同時に3-4では「私の神よ、お救いください。すべての敵の顎を打ち、神に逆らう者の歯を碎いてください」とある。一般論として言えば、宗教には戦うことと平和を求めるこの両側面が内包されている。したがって宗教に関わる者はそれぞれの時処位において、それぞれの判断から、宗教の中にある平和への傾きを強くしていかなければならない」というものです。

詩編を引用したのは聴衆の大半が一神教の関係者であるからです。見えないキリスト教中心主義へのいらだちがテロ等の背景にあるのではないかという鶴岡賀雄(東大、宗教学)先生のご指摘を意識しての発表でした。キリスト教の場合、大難把に言えば、旧約聖書で預言されていることが、新約聖書で成就したという立場です。そうすると他の宗教の存立が百パーセント認められるということがむずかしくなります。

聖エジディオ共同体は大学紛争が盛んなころ、ローマの街が汚れていたので高校生たちが自主的に掃除を始めたことがきっかけとなり形成されていった団体です。筆者が初めて訪れたときは会員数2千人でした。それが、30数年を経て会員数が世界で6万人になっています。在家の若人たちで作られた団体ですが、だんだん成長していく中で、聖職者も多数輩出され、バチカンの大大臣を務めている方もいらっしゃいます。「平和の祈りの集い」がメインの行事ではありません。ボランティアとして老齢者、路上生活者、生活困窮者、難民等への支援と教会での祈りを中心に活動する人たちです。明るく楽しく聖書に認められたことを実行していくところに特徴があるように感じられます。

ちなみに来年はポローニア(イタリア)で「祈りの集い」が開催されると聞いております。



閉会式で臨済宗の宝積玄承老師とご一緒に平和の灯火を点火

特集2 ヨーロッパ国際布教50周年

ヨーロッパ国際布教50周年記念行事参加報告

さとう えいじん (新潟県興源寺徒弟)

2017年5月11日(木)より14日(日)まで、フランスの禪道尼苑においてヨーロッパ国際布教50周年の記念行事が開催されました。各国から参集した宗侶と各寺・各禅センターのメンバー等は、晩天坐禪や朝課、13日よりのシンポジウム、14日の法要などに参加し交流を深めました。4日間彼らと行動を共にし各行事に参加させていただきましたので、その様子をご報告いたします。

05月11日(木)

夕刻、パリ市内仏国禪寺に続々とヨーロッパ人宗侶が到着。フランス国内やスイスなど近隣の国からやって来た僧侶たちが一同に大型バスでプロアにある禪道尼苑を目指します。滞在していたドイツの普門寺から移動して来た私も、ここからご一緒させていただくことになりました。皆さん固い握手で和やかに再会の挨拶を交わしています。私は初代ヨーロッパ開教総監弟子丸泰仙老師の写真を仏国禪寺内のあちこちで目にしながら、今なお残るような老師の息吹を感じていました。

弟子丸老師は1967年单身にて渡仏されましたが、禪の実践を渴求するヨーロッパの人々に指導者として圧倒的な支持をもって迎えられ、次々と教線を拡大していました。莫大数の信者を得て各地での摂心に邁進され、1970年にはヨーロッパ禪協会を設立し、後に禪道尼苑を開設されています。残念ながら1982年に67歳の若さで早逝されましたが、その後残された多くの道場は弟子のヨーロッパ人僧侶に継承され今に至ります。

その弟子丸老師のお弟子さんたちと共に高速道路をひた走り、ロワール川沿いの美しい街並みが見え始めた



朝課後は毎朝弟子丸老師の墓所にお参りをしました

頃、バスは森の中へと進路を変えました。広大な森が続きます。この敷地がすべて禪道尼苑の敷地なのだと聞いて驚きました。しばらくすると17世紀に造られた美しいお城が目の前に現れました。これが曹洞宗のお寺、禪道尼苑なのです。大勢の人ばかりがあちこちに出来ていました。私もなんとか食堂の2階にある部屋を与えられ落ち着きましたが、部屋はドイツのハノーバーと、フランス、そしてドイツ普門寺の尼僧さんと一緒に4人部屋でした。皆さん明るくすぐに意気投合しました。

初日の夕食会場で初めて大勢で集合し、皆でフランス式精進料理のディナーを楽しみました。

05月12日(金)

6時 振鈴

6時30分~8時30分 晩天坐禪・朝課

緑が朝露に濡れる中、各建物から座蒲を手に黒衣の僧侶や参禪者たちが法堂に集まって来ました。300人以上か。とにかく大勢で一斉の坐禪です。経行は人が多すぎて半歩踏み出すスペースもないぐらいに接近せざるを得ず、結局翌日から取りやめになりました。坐禪が終了し、独特の節回しの「搭袈裟の偈」が法堂に低く響き渡りました。朝課は本尊上供のみ。坐具が重なる中での三拝となりました。

8時30分~9時 小食

9時30分~12時30分

シンポジウム 第1部「ヨーロッパ国際布教の50年」

会場にはハワイ国際布教総監駒形宗彦老師や北アメリカ国際布教総監秋葉玄吾老師等も到着されました。ステージでは映像とスライドショーなどによるヨーロッパの禪の歴史や、現代の曹洞禪の広がりをまとめた樹形図などがフランス龍門寺のワンゲン盡元老師等により紹介されました。説明はフランス語と英語で成されました。

13時~13時45分 中食

15時~18時30分

シンポジウム 第2部「ヨーロッパ曹洞禪の現在」

寺院・禅センターの主宰者やヨーロッパの国際布教に携わって来られた方々によるそれぞれ約5分間のスピーチ。日本からも南アメリカ国際布教総監采川道昭老師、国際センター所長藤田一照老師、ヨーロッパ国際布教総監佐々木悠輔老師、大本山永平寺国部部長横山泰賢老師などがスピーチに参加されていました。



外で御挨拶を取つてくつろぐ僧侶たち

20時 夕食

夕食の後、毎晩皆が寝静まる頃になんでも外でイタリア普伝寺のグアレスキー泰天老師の話に大勢の人が集まり聞き入っていました。彼らはイタリア各地から総勢60人ほどで一緒にやって来たのだそうですが、泰天老師は大きな身振りでお話をされていて、皆さんがあきづけられるように熱心に耳を傾けていたのが印象的でした。

○5月13日(土)

6時 振鈴

6時30分～8時30分 曙天坐禅・朝課

8時30分～9時 小食

9時30分～12時30分

シンポジウム 第3部「未来の展望」

ヨーロッパ国際布教の未来について活発な議論が交わされました。

13時～13時45分 中食

15時～19時 エキスポ

午後からは日本からの一行、宗務庁のツアーの皆様も到着し、エキスポが始まりました。野外の特設ステージではイタリアのお寺の太鼓グループによる和太鼓演奏があり、威勢の良い音がプロワの森に響き渡りました。ハワイの国際布教師アイエア太平寺の駒形修二師も飛び入りで参加され、思わず国际交流となりました。またシャトーの後ろに特設された会場では、各寺院・禅センターの紹介ブースが設けられていて、各国寺院相互にとっての貴重なコミュニケーションの場となりました。また一般の入場も可能だったこの日は禅道尼苑内のガイドソーアや初心者のための坐禅ワークショップも行われていました。

20時～23時 晩餐会

食堂いっぱいに並べられたテーブルに参加者が着席し(本行事の参加者自体は全体で約500名)盛大な晩餐会が開催されました。大本山永平寺副貫首南澤道人老師よりの御挨拶、次に宗務長金田隆文老師よりフランス語の御挨拶と乾杯の音頭がありました。日本から



シンポジウム会場の外は交流の場としていつも賑やか

は他に大本山總持寺監院乙川暎元老師、大本山永平寺副監院武内宏道老師、洞松寺専門僧堂師家鈴木包一老師、教化部長成田隆真老師、教化部長山本健善老師等沢山の方が出席しておられました。

この日はパーティーが終了した後も食堂の外ではイタリア人の陽気な歌声が遅くまで止まず、にぎやかに夜が更けていきました。

○5月14日(日)

6時30分～8時30分 曙天坐禅・朝課

8時30分～9時 小食

9時 五體三拝

10時～10時30分 弟子丸泰仙初代ヨーロッパ總監追悼法要

ヨーロッパ国際布教師レッシュ雄能老師が導師の下、弟子丸老師の追悼法要が厳修されました。何度もなんど繰り返される大悲心陀羅尼の中、焼香に向かう人々の長い列が続きました。

10時30分～11時 ヨーロッパ国際布教功労者追悼法要

導師はヨーロッパ国際布教總監佐々木悠峰老師。

11時～12時 ヨーロッパ国際布教50周年慶讃法要

導師は宗務長金田隆文老師。彼の地にしめやかな御詠歌が奉誦され、ヨーロッパ人僧侶と日本人僧侶が入り混じっての行進が行われ、東々と法要が厳修されました。

最後に和やかに記念撮影が行われましたが、「次は100周年ですよ。」という佐々木總監の声に、あちこちから笑い声がこぼれていきました。

「普段他の国や、他の寺院と会う機会はあまりないので、今回はとても良い機会となつたし、良い刺激を受けた。」と参加者の一人は感想を語っていましたが、弟子丸老師の開教に始まったヨーロッパの曹洞禪の結束が、この50周年行事を通してまた強く固められたのを確信させられる一言でした。

こうしてすべての行事を終えた参加者等は、それぞれの修行についてまた新たな思いを携えて帰路についたのではないかと思われます。

特集2 ヨーロッパ国際布教50周年

ヨーロッパ国際布教50周年記念慶讃法要ツアーに参加して

黒木淳祐 (秋田県満蔵寺副住職)

5月12日。羽田空港を出発した飛行機は、約12時間のフライトを経て小雨煙るパリのシャルルドゴール空港に到着。夕刻の空に架かるきれいな虹が私達を迎えてくれました。雨模様のパリをバスの窓から眺めながらレストランまで移動し、軽めの夕食をとつてからホテルに向かいました。翌日から始まる記念行事に備え、この日は早めに就寝しました。

2日目。ホテルをチェックアウト後、フランス中央部に位置するロワール地方を目指して出発しました。パリから2時間半ほどバスに揺られ辿り着いたロワール地方は観光地としても有名で、中世の古城が数多く点在し、ユネスコの世界遺産にも登録されているようです。美しい古城や中世の街並みを堪能しながら、私たちを乗せたバスはプロワ郊外の森の中へ。看板の矢印に従い道をすんざん進んで行くと、突如として赤茶色のお城が現れました。禅道尼苑です。バスを降りると「シャトー」と呼ばれるその赤茶色の建物に案内され、大きな鏡の掛かった部屋を控室として使わせていただくことになりました。暖炉横の壁に掛けられた弟子丸泰仙老師の書、洋箪笥の上に安置された數々のエキゾチックな仏像にしばらく見入ってしまいました。

その後、メルシェ黙峰老師に禅道尼苑を案内していただくことになりました。法要会場となる法堂は外観も内部も実用性に富んだシンプルな作りで、法堂の床には畳ではなく絨毯が敷かれる等、日本のお寺との違いが随所に感じられました。私たちが法堂内を拝観しているその横では、坐禅のワークショップが行われていました。一般的の参加者が熱心に宗宿の話に耳を傾け、質問し、納得しながら坐禅をする姿に、ヨーロッパの布教のあり方を垣間見た気がしました。

諸堂拝観を終え、夜の晩餐会までの時間をシャトー裏手に設けられたテントで過ごしました。そこにはヨーロッパ各地の寺院・修行道場が写真パネルやパンフレットを使って、修行の様子や活動を紹介するブースがサンガごとに設置していました。どのサンガも日々の坐禅はもちろんのこと、摂心も頻繁に行われているようで、坐禅を中心として



黒木師(左)とメルシェ黙峰老師(中央)、秋田県東傳寺住職 鈴木智之師

ヨーロッパの禅が広まっているのだと実感しました。

晩餐会では禅道尼苑の庫院でつくられた彩り豊かな精進料理をいただきました。ヨーロッパ各地から参加された方々は普段それぞれの道場で坐禅を取り組むため、または地理的な理由から、サンガ同士の行き来はあまり無いと伺いました。そのため、前述のサンガごとのブースや夜の晩餐会は参加者にとりましても久しぶりの再会を喜び合い、親睦を深める場となったようです。笑顔があふれ、和やいだ雰囲気の素敵な晩餐会でした。

最終日。ホテルでの朝食中に雨が降り始め、一時天気が心配されましたが、禅道尼苑に到着する頃には雨は止み、青空が広がっていました。衣に着替え身支度をととのえていると、法要の始まりを告げる鐘が鳴り始めました。他の参加者と共に急いで法要会場に向かいました。法堂には曹洞宗宗侶、参禅者合わせて400人ほどの方がいらっしゃったのではないでしょうか。隣同士の肩がくっつく程に混み合う中、記念行事法要が始まりました。

最も印象的だったのは、最後に行われたヨーロッパ国際布教50周年慶讃法要です。50年の節目を祝して般若心経をお唱えしました。参加者の思いが重なったのか、お経の声もより一層大きめに感じられました。50年前單身でフランスに渡り、只管打坐の実践を示した弟子丸老師の情熱が、50年の星霜を経て人々に受け継がれ、浸透してきた曹洞禪。その喜びが今まで般若心経に乗ってヨーロッパに響き渡っているように思いました。

3泊5日の短いツアーではございましたが、実に有意義な時間を禅道尼苑で過ごすことが出来ました。坐禅を中心広まっていたヨーロッパの布教を参考にして、一仏兩祖の教え、禪の教えを求めて人々が訪ねてくる僧侶、人々が集うお寺を目指し、しっかりと自己研鑽に努めて参りたいと思います。ヨーロッパ曹洞禪がこれからも発展し、全世界へ響き渡りますことを心よりご祈念申し上げ、筆をおかせていただきます。



禅道尼苑の梵鐘

… 海外レポート① …

北アメリカ国際布教総監部における現職研修会に出講して

菅原研州（愛知学院大学教養部講師・宮城県城国寺副住職）

2017年6月1日、ロサンゼルス禪宗寺を会場に、北アメリカ国際布教総監部の国際布教師の皆さまを対象とした現職研修会に出講いたしました。テーマは「曹洞宗の御袈裟と服制について」とし、宗門における御袈裟や制度(服制)の歴史についてお話ししました。

特に、海外では「環無し」の絡子を着ける場合が多く、また「如法衣」と呼ばれる形態の御袈裟を着ける方も散見されます。しかし、特に環無しの絡子は現状の「曹洞宗宗制」「曹洞宗服制規定」では、明確な違反となります。また、「如法衣」についても、本山僧堂においては用いられていないと聞きます。よって、以下の内容でお話しすることで、現状の服制の位置付けなどを解説し、理解を促しました。

1.はじめに 曹洞宗の御袈裟の理念

2-1、「正法眼蔵」「伝衣」巻

2-2、「正法眼蔵」「袈裟功德」巻

3、江戸時代の御袈裟研究

4、両大本山の三衣論争とその終結

5、本研修の結論

この講義の中でもっとも力を入れたのが、**3**と**4**になります。確かに、**2-1・2**の通りで、宗門の御袈裟の理念としては、道元禅師の「正法眼蔵」「伝衣」「袈裟功德」両巻に依拠すべきことは分かっております。ところが、「正法眼蔵」からは、実際に道元禅師がどのような形態の御袈裟を着けていたのかが、今一つ判然としないのです。以前、2010年に京都国立博物館で行われた「高僧と袈裟」で、臨済宗各寺院で伝えていた「伝衣」について展示されましたが、鎌倉時代、宋朝より伝わった伝衣の形態はいわゆる「長方形」ではなく、江戸時代に曹



筆者(左)と国際禪センター所長 藤田一照老師(右)

洞宗の学僧・逆水洞流禪師(1684~1766)が「象鼻衣」と呼んだ、真ん中が凹んだような形態をしているのです。そこで、次の教えを見てみたいと思います。

わが大師訥迦牟尼如来、正法眼蔵無上菩提を摩訥迦葉に附授するに、仏衣ともに伝授せりしより、嫡嫡相承して、曹溪山大鑑禪師にいたるに、三十三代なり。その体・色・量を親見・親伝せること、家門、ひさしくつたはれて、受持、いまにあらたり。すなはち五宗の高祖、おのの受持せる、それ正伝なり。あるひは五十余代、あるいは四十余年、おのの師資みだることなく、先仏の法によりて搭し、先仏の法によりて製することも、唯仏と仏の相伝し証契して、代代をふるに、おなじくあらたり。

『正法眼蔵』「伝衣」巻、春秋社『道元禅師全集』巻1・358頁

このように、道元禅師は五宗(禪宗五家)の高祖がそれぞれ摩訥迦葉尊者が仏陀より受け嗣いだ御袈裟の「体・色・量」を嫡嫡相承しているというのです。そうなると、臨済宗で伝えていた、「長方形では無い御袈裟」についても許容されねばなりませんが、熊本廣福寺には、道元禅師が頒されたという二十五条衣を伝えており、それは「長方形」です。この矛盾は容易に解き難いので、結論は出さずに、現状に到る経緯を提示し、江戸時代の学者達による「律」の研究と議論を通して、今のような形に定まってきたこと、また、その時代に、現在「如法衣」と呼ばれる御袈裟が出て来たことなどをお話しし、現状の「如法衣」が決して、道元禅師の時代に遡るものではないと申し上げました。

また、絡子の件は、**4**において示した両大本山の論争から大きな影響を受けています。江戸時代末期、両大本山は様々に争い、それは明治時代になってからも続き



ロサンゼルス禪宗寺にて講義が行われた

ました。その中に御袈裟の「環」の有無に関する問題もありました(三衣論争と呼称)。しかし、明治政府の仲介などもあって、両大本山は和睦の盟約を結び、その結果の1つが両大本山東京出張所、後の曹洞宗務局の設置です。その過程で、御袈裟の形態については当初、各宗派の意趣に任されていましたが、徐々に宗派としての統一性が強まってきた明治20年代に入ると、行持の統一化(いわゆる「洞上行持軌範」の制定)が行われる中で服制も統一され、明治21年1月1日をもって、七条衣以上の御袈裟は環無し、五条衣(絡子・掛絆)は環有りと定められたのです。

よって、宗門が両大本山である以上、絡子は必ず「環付き」でなければならず、それを恣意的に改めるべ

きではないと申し上げました。他にも、その場で御要望があったため、「搭袈裟の儀」の唱え方や、その際の御袈裟の扱い方(頭に乗せる方法)などの基本的な作法も示しました。

この研修が国際布教師の皆さまによる日々の参究の一助になることを願って止みません。

また、この機会を頂戴した曹洞宗宗務局教化部国際課の皆さま、北アメリカ国際布教総監部の皆さま、そして、通訳から当日の移動に及ぶまでお世話をありがとうございました。曹洞宗国際センター所長の藤田一照先生、書記の伊藤祐司先生、伊藤大雅先生、実にありがとうございました。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

合掌

… 海外レポート② …

南米国際布教師辞任後の報告

佐藤鴻舟（富山県明禪寺住職）

師僧の思い

この度、私は南米国際布教師辞任後一時帰国を決意し、4月下旬から自坊にて病氣で療養中の師僧のそばに居りました。母に見守られながら師僧は9月4日、私が日本を出発して間もなくして遷化致しました。この数ヵ月間ブラジルに居ては伝える事が出来なかつた感謝の言葉、「お父さん今まで有り難う」の一言です。今までどれ程の葬儀を行つて來たとはいへ、貴い泣きをこらえる事は出来ても、自分で発声した言葉の涙は抑えようのないものでした。

師僧は曹洞宗ハワイ国際開教師として1965年から1975年にかけてハワイ州ハワイ島コナ大福寺で布教活動を行つておりました。常々大福寺での活動やメンバーの方々、開教師また僧侶との思い出を話しては懐かしんでいました。

私が今でも憶えている師僧のハワイでの活動は、日本語教室・日曜礼拝・Y.B.A・梅花講・観音講・仏前結婚式・高校卒業祝賀会といった行事がありました。中でも楽しみにしていたのは日曜礼拝です。イースターの日は友達とゆで卵にいろんな色を塗り、翌日の朝早く親達がそれを隠し礼拝後子どもたちがそれを探すといった遊びや、クリスマスデー・感謝祭といったカトリックの行事が混ざった活動もありました。お盆には大福寺の前庭で盛大な盆踊りが繰り広げられ、幼いながらもそのY.B.A青年部が踊る盆踊りが格好良く見えたものです。観音講については、師僧は二度に渡つて団体を儲け三十三観音礼所を回り、その御寺の砂を集め、観音講の日に各観音様

の前にそれを敷き、観音堂で巡礼供養を行なつておりました。

師僧がこの大福寺で行なつた最後の大事業が観音堂裏脇にある納骨堂の建設でした。

又、師僧は大福寺で結成を修致しました。日本帰國後も多くの方々との繋がりを大事にして信念を持って布教活動に取り組んで来ました。

ブラジル、ローランジャ仏心寺

師僧のおかげで私は1990年に23才の若さで、師僧に見送られながらブラジルへの片道航空券を持って出国致しました。その時の師僧の言葉は、「ブラジルに骨を埋める気持ちで行ってきなさい。」というものでした。その言葉で、27年間ブラジルでの活動を続ける事が出来たのではないかと思います。ブラジルに渡つた当初はポルトガル語が全く解らずにいました。数ヵ月経つと話を聞き取る事が出来るようになり、そこで初めてポルトガ



1990年ローランジャ仏心寺の観音法要にて

語の中には英語と似た言葉が有る事に気付きました。最初の布教地はパラナ州のローランジャ仏心寺でした。そこで言葉を学ぶにあたり先ず努力したのは、グアバやタンジェリンを取るのに境内に無断で侵入する子どもたちとの疎通からでした。子どもたちの中には英語が分かる子もいて、私が英語で聞き向こうはポルトガル語で答えてくれました。多くの人が外国に出て先ず困るのが言語の問題ではないでしょうか。私の師僧もやはりハイイでは言葉に苦労していたのを思い出します。

次に感じるのは文化や習慣と考え方の違いです。ある時、ブラジルのおおらかさを感じさせられた事がありました。ある日系人家族の法事の日にサッカーの世界大会で延長戦が続き、時間が過ぎているにも関わらず家族が揃うのを待つこと一時間、やっと法事を執り行うことが出来た事もありました。

ローランジャの街は、静かで落ちつける所でした。その分お寺の信者数も少なく生活が厳しい時もありました。そういう中であっても現地の方々の心の温かさを感じる事が度々ありました。昼時や夕時に信者さんの家を訪ねると「和尚さん、食事して行きなさい。」と勧めてくださっていただいたことも何度かありました。

こういったところはおそらく、皆さんの親または祖父母達の移民の頃からの習慣だと思います。移民や開拓の頃は、今のような車があつて当たり前な時代と違って歩くのが普通だったと聞いています。足りない食料品を買うにしても2から8km歩いたり馬車で街に出なければならなかつたりとお互いに大変な思いをして助け合いながら暮らして来られたようで、または遠方の來客に食事や宿泊場所を与えた事もあったようです。

モジ・ダス・クルーゼス禪源寺

私が国際布教師として最後活動をしていたのはサンパウロ市内から約60キロ離れたところにあるモジ・ダス・クルーゼス市の禪源寺です。檀信徒の数は約250家族で、活動は毎週土曜日朝7時参禪会、第3日曜日月法要、梅花講などがありました。また、毎週土曜日に



モジ・ダス・クルーゼス禪源寺地蔵前にて

は合わせて約5から7家族の法事がありました。葬儀は月平均3家族前後です。

禪源寺で法要のあとポルトガル語による法話をっていました。ブラジル日系移民は100年を既に過ぎており、今は2世・3世の皆さんが色々な方面で活躍している時代です。お寺には70才代の1世もお参りに来ますが、信仰への考え方方が少し違っているように感じます。僧侶を中心に仏教について勉強するわけでもなく信仰はあるようではほど深くはない。中には自分を住職より良く見せようとする信者もいる。これは海外だけではなく日本に於いても同じかもしれません。私は最後の頃、禪源寺で仏法僧についてお話を来ていましたがはたして通じているだろうかと思うことがあります。今後は皆さんに仏法僧に本当に帰依して頂き、僧侶と檀信徒が共に理解し合いながら、3世・4世もしくはブラジル人へ仏教と曹洞宗の教えが末永く続くことを願っています。

今後のこと

私は突然お世話になった禪源寺を出たため後任が決まるまで、もしくはサンパウロ市内の仏心寺に僧侶の人数がそろうまでは、仏心寺でしばらく修行させていただきます。

ブラジルから日本に5から6人の修行僧が来ています。他にも多くの國々からも修行僧がやって来て、僧堂で頑張っています。ある僧堂で一人の日本人修行僧に会いました。彼は下山後、海外への布教がしたいとのことでした。布教先として南米をはじめハイイ、北米、ヨーロッパがあることをお話ししました。ただ強く言えることは、どこの国であれ覚えることが沢山あるということです。

日本に外国人が修行の出来る環境と場所が増えること、そして海外で布教活動がしたくなる僧侶を育てるのもまた大事なことだと思いますが、これからはこういった皆様の御手伝いや何かのお役に立てるよう努力して参る所存であります。今後とも各位ご寺院様方の御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



南米別院仏心寺にて

… 海外レポート③ …

北米研修報告

おお さわ こう ゆう
大澤 香有 (長野県梅翁院徒弟)

この度私は、S Z I より海外研修助成金を頂戴し、平成29年4月17日から7月11日までの85日間、北アメリカのカリフォルニア州にて研修を行ってまいりました。研修内容は、下記の通りです。

4月17日	渡米(成田→サンフランシスコ)
4月17日～5月22日	天平山禪堂
5月23日～6月3日	サンフランシスコ禪センター
	曹洞宗国際センター
6月4日	グリーンガルチファーム禪センター
6月5日～6月12日	天平山禪堂
6月13日～6月16日	曹洞宗国際センター
	桑港寺
	オークランド禪センター 好人庵
	バ克莱禪センター
	ハートフォードストリート禪センター
	サンタクルーズ禪センター
	宗侶個人開催の坐禪会
6月17日～6月27日	タサハラマウンテン禪センター 禪心寺
6月28日～7月7日	ソノママウンテン禪センター 現成寺
7月8日～7月9日	天平山禪堂
7月10日	帰国(サンフランシスコ→成田)

天平山禪堂

4月17日(火)、サンフランシスコ空港に到着し、まずははじめに向かったのは天平山禪堂。現在、鋭意建設中の天平山禪堂は、サンフランシスコからナババレーを越えて約2時間半北上して行った山の合間にありました。周辺には民家が1、2件あるだけで、一番近くの小さな町に出るまで車で20分、スーパーに買い物に行くには30分走らないといけないような、非常に静かで人里離れた場所に位置していました。今回私は、日本伝統建築を



渡米前成田空港にて職人たちと(一番左が大洋師)

専門とする大工さん2名とその奥様1名、瓦職人さん4名、神奈川県吉祥院御住職 尖廣伸師と計9人での天平山禪堂滞在となり、その中で職人たちの下支えをする典座を務めさせていただきました。到着してしばらくの間は、他に例を見ない大きい坐禪堂の骨組みを前に、これからどのような坐禪堂が出来上がっていくのだろうかと、想像もつかずただ驚くばかりでしたが、職人たちの見事な仕事ぶりに坐禪堂は日に日に変化を遂げていき、2ヵ月で瓦屋根は完成し、内外の壁は出来上がり、見事なまでに我々の普段慣れ親しんでいる禪堂の姿に近づいてきました。職人さん達から、せっかく坐禪堂を作っているのだから坐禪をしてみたいとの声が上がり、毎週木曜日の朝は、皆で一緒に坐禪することになりました。人里離れた山奥で、坐禪堂を作っている職人さん達と一緒に坐禪が出来たことは一生忘れられない良い思い出となりました。6月11日には、天平山坐禪堂を会場として日本建築や禪に関心があるアメリカ人を対象とした瓦のワークショップが行われ、参加者は瓦を屋根の模型に釘で打ってみたり、瓦割りをしてみたりと、直接に瓦に触れることが出来、瓦屋根の葺き方を学ぶことが出来ました。このワークショップは大盛況に終わり、この日をもって、瓦職人さん方の仕事は終了し、大洋さん夫妻1組を残して全員が天平山を後にしました。

サンフランシスコ禪センター 発心寺

5月22日(月)～6月3日(土)の間、サンフランシスコ禪センター 発心寺にて約2週間の滞在。現在、このセンターには約40名の方が住んでおり、ここに住みながら長期間修行している人、短期滞在のゲストスチュ



天平山坐禪堂内部



完成間近の天平山坐禅堂屋根

アント、朝晩の坐禅に出ながら日中は仕事に通う人と、様々なライフスタイルの人が混在していました。私が滞在していた期間は、プラクティスピリオドという集中修行期間で、1日の流れは、下記の通りでした。

5:00	起床	12:30	昼食
5:20	坐禅	13:30	ミーティング
5:55	経行		作務
6:05	坐禅	15:00	フリータイム
6:40	朝課	17:35	坐禅
7:05	作務	18:20	晩課
7:20	朝食	18:30	夕飯
9:00	ミーティング	19:30	日替わりイベント
	作務		
12:10	日中調経	21:00	終了

月～金はこのような差定で、夜の日替わりイベントは、法話の会だったり、講演会だったり、若者の集いだったりと様々な行事が行われており、毎回会場がいっぱいになるほど多くの参加者が集まって賑わいを見せていきました。土曜日の午後から日曜日の夜までは自由時間となり、外出が可能となります。朝晩の坐禅は、外部からの参加が可能で、毎日外から多くの参禅者が集っていましたが、その中でも土曜日の朝は広い坐禅堂が埋め尽くされるほどの参禅者が来っていました。このサンフランシスコ禅センターの御開山は、アメリカに禅を広めた第一人者である鈴木俊隆老師で、鈴木老師がサンフランシスコジャパンタウンにある桑港寺の住職に赴任され、参禅会を行っていたところ、日系人を凌ぐ多くのアメリカ人ヒッピーたちが参禅会に集まるようになり、アメリカに住む日系人のための寺院とされていた桑港寺ではそのことが問題視されてしまい、やむなく桑港寺の隣に別の建物を建て、日系人とアメリカ人を別々に坐禅指導されたそうです。その際に新しく



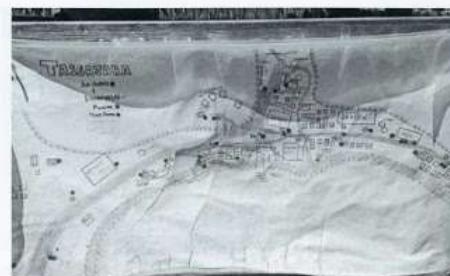
天平山禅堂で朝の坐禅

建てられた建物が、この禅センターの発足となり、今でも多くの人が参禅に集まっています。現在この禅センターは、広く一般の人に門戸を開き、僧侶、在家得度者、在家者が共に坐禅を行っており、アメリカ国内だけではなく、ヨーロッパやアジア圏からも修行や修行体験に来ている人が多く見受けられました。年齢層も幅広く、夫婦、親子で参禅に来ている人や、学生も多く見られました。また、この禅センターは教育機関の一つとして州から認められているようで、長期滞在希望者にはビザを発行してもらえるそうです。街中という立地環境を最大限に活かしたセンターの運営・活動形態は非常に学ぶことが多く、人々のニーズに合った布教活動の行われている禅センターでした。

タサハラマウンテン禅センター 禅心寺

6月19日(月)～27日(火)の間は、タサハラマウンテン禅センター 禅心寺に滞在させていただきました。この禅センターは、サンフランシスコから車で南に3時間ほど走った谷底にあり、途中から乗用車では入れないような山道に変わるために、多くの参禅者は禅センターから出ている送迎車を頼みます。私も近くまで乗用車で行き、途中から送迎車に乗って禅センターに向かいました。送迎車は、断崖絶壁の際を1時間ほど谷底に進んで行き、その先に広々と禅センターは立っていました。

この禅センターは、季節によって安居の形態が大きく異なっており、夏の期間は、リゾート施設として一般客に施設を解放しています。修行者は朝晩の坐禅、勤行に加え、作務の時間は一般客のために部屋を整えたり、食事を作ったり、掃除をしたりといった活動に従事します。この期間は、多くの人が温泉や自然を楽しみにリゾート地として旅行に訪れるそうです。また、施設内に大きなリトリートホールもあり、ヨガなどのリトリートとして数日間団体で訪れるという人も少なくありませんでした。大自然の中、温泉にゆっくりつかりながら満点の星空を眺めることが出来るこの禅センターは、



タサハラ地図

年々口コミやネットでその存在が広がっていき、今では前もって予約をしないと宿泊出来ないくらいの人気リゾート施設となっているそうです。また、温泉や自然を楽しむだけでなく坐禅やお勧めに参加するが出来、心落ち着けてゆっくりと過ごせる場所としても根強い人気を誇っているのだそうです。

冬になると、一般客の受け入れを完全にストップし、安居に専念します。安居者以外の滞在は許可されず、差定も夏とは大きく異なり坐禅の時間が圧倒的に増えるそうです。今回の夏安居の修行者は70人ほどで、冬になるともっと参加者は増えたのだそうです。今冬は、安居100回目にあたるそうで、今まで以上に参加者が増えることが予想されました。想像を絶する人里離れた谷底に、こんなに多くの人が修行をしながら生活していることに驚きを隠せませんでしたが、簡単には町に出られない環境の中、集中して修行に打ち込み自己を見つめていた多くの修行者たちと共に坐禅が出来たことは、私にとって大変貴重な経験となりました。

ソノママウンテン禅センター 現成寺

6月28日(水)～7月7日(金)の間、サンフランシスコから1時間半ほど北上していったソノマという地区的山中にある、ソノママウンテン禅センターに滞在いたしました。ソノマは、現在ワインが有名で多くのワイン畑とワイナリーがありますが、この禅センターが設立された当時、周辺に民家や畑等ではなく、ただ山だけがあったそうです。この禅センターは1973年、鈴木俊隆老師とその弟子であったKwong寂照師、Kwong Shinko師によって設立されました。ここはアメリカの禅センターの中でも珍しく、日本の伝統形式に準じている部分が多く、ここに安居を希望する人は修行に専念出来るのみを受け入れているそうです(禅センターに住みながら出勤したり、賃料を払って自分の好きな部屋を持ったりすることは出来ない)。アメリカの多くの禅センターはオリジナルのスタイルを築き、日本との交流が薄れているあるいは、ほとんどないところが多いのですが、寂

照師は現在も日本との交流が深く、鈴木俊隆老師亡き後も鈴木包一老師と深い交流を持ち、その他多くの日本宗侶とも親睦を深めておられます。ソノママウンテン禅センターを設立後、弛まず坐禅を実践され続け、今では多くの修行僧やお寺のメンバーさん、地域の方々に支持され、多くの人が独参に訪れています。アメリカの他州からわざわざ独参に来られる方も多いようで、遠くて禅センターまで来られないという方には、スカイプなどで独参を行うこともあるとのことでした。寂照師が一人一人に親しく指導されている姿には、非常に深い感銘を感じました。私も2度、独参させていただきましたが、何年経とうと薄まらない鈴木俊隆老師への敬慕の念と、坐禅に対する真摯な姿がとても印象的でした。様々なスタイルを持つカリフォルニアの禅センターの中では、このソノママウンテン禅センターが一番日本に近い雰囲気を持っていました。

今回の研修で、様々な禅センターを訪問し、各々のスタイルや様々な参禅者の方々と交流が出来たことにより、アメリカ曹洞宗の現状の一端を知ることが出来ました。また、今後の国際布教活動を考える上で非常に多くの学びとなりました。北米開教は間もなく100周年を迎えるますが、実際に現在多くの禅センターが生まれるきっかけとなった鈴木俊隆老師の開教より未だ約50年です。そういったことを考えると、北米に禅や修行の形は伝わってはいるものの、我々が道元禪師から伝えられてきた「禅の精神」は、もう少しアメリカに普及されるまでに時間が必要なように感じられました。サンフランシスコ禅センターで知り合った修行中の女性に、「私たちにはまだ足りないものがあるような気がしている。その何かをあなたたちは持っているように感じる。」といった相談を受けました。素晴らしい布教活動、多くの修行僧、素晴らしいセンターと、形が完成している今、ようやくそこに流れるスピリットを耕していく準備が整ってきたようにも思えます。海外の多くの禅センターで、多くの人々が道元禪師の教えにより深い安心を得、人生がより豊かになるよう、今後も国際布教について考え、今自分に出来ることを一つ一つ実践し精進していくことを思います。



サンフランシスコ禅センター開山堂にて

… 海外レポート④ …

ドイツ普門寺を訪ねて

佐藤慧真（新潟県興源寺徒弟）

2017年4月26日より約2ヶ月に亘り、ドイツのバイエルン地方(ドイツ南部、ミュンヘン郊外)にある大悲山普門寺に滞在させていただきました。住職の中川正壽老師には大変お世話になり、貴重なお話を日を重ねて沢山伺い、ヨーロッパの人々にふれ合い皆様の厚意を十分にいただきながら、有意義に時間を過ごすことが出来ました。

アイゼンブルッフ普門寺は元農家レストランから旅籠になったものを改築して作られたお寺で、宿泊施設が完備された研修施設(セミナーハウス)のような佇まいをしています。坐禅修行が中心ですがヨガなどの宿泊セミナーも行われていて、私の滞在中も人々が入れ替わり立ち代わり訪れていました。

普門寺の僧侶は住職と正然さんという尼僧の二人だけですので、摂心時には普門寺のサンガのメンバー(ドイツ全国に散在)が配役に付いていました。関わり方は人それぞれのようですが、面倒な進退にも皆さん積極的に取り組んでおられました。

台所で小食用の玄米粥を作っていた方にお話を伺うと、坐禅歴は20年以上で、以前はキリスト教の教会で坐っていたとのことでした。指導役のシスターが高齢になったので、新しい指導者を求めてあちこちの参禅会を訪れるうちに中川老師に出会い、自分が学ぶべき師に間違いないと確信して入会したと笑顔で話して下さいました。

実は、ヨーロッパ特にドイツではエノミヤ・ラサール神父を筆頭にして、坐禅をキリスト教徒にとっての実践的な瞑想法として宗教生活に取り入れるため、鎌倉の三宝教団などで本格的に修行を行った何人のキリスト教のリーダーたちがいたのです。実際中川老師が1979(昭和54)年に渡独した頃は、曹洞宗よりも三宝教団の坐禅の方がよく広まっていたそうです。

その後ドイツの禪ブーム自体はチベット仏教の隆盛に



摂心では、サンガのメンバーが淨人を担当

伴いだんだん下火になっていきましたが、1962年から65年にかけてのヴァチカン公會議以降ローマ教皇より支持を受けたキリスト教者の瞑想運動は盛んになっていきました。ラサール神父の生前は、神父の摂心は予約が超満員だったそうです。ただし現在では、バチカンの中で否定的な態度をとる勢力も再び強くなっていて、坐禅を熱心に勧めていた修道士は法話の禁止令が出された例もあるとのことでした。

ところで、スイスにラサールハウスというとても大きなセミナーハウスがあり、今でもマネージャーセミナーなど人が人気になっているようです。このようなキリスト教系のセンターはヨーロッパ各地に存在し、どんどん拡大して今では禪ではなくチベット系やテラワーダの仏教、他の宗教やヨガやダンス等、あらゆる種類のセミナーを運営する大きなスピリチュアルセンターに成長を果たしています。ドイツ語圏にも本当に沢山あるようで、いくつかパンフレットを見ましたが年間を通して多くのセミナーが開催されているようでした。そういうところに人々は日本人がカルチャーセンターに行くように、レジャーとしてスピリチュアルなことを学びに行っているのです。普門寺の運営体制にもそのような文化的な背景を感じられます。私が普門寺に滞在中も様々なセミナーが開催されており、皆さんとても穏やかな表情で日々を過ごしておられました。

緑の広がる敷地にあちこち置かれたベンチ。静寂の中の鳴らし物の余韻。沈黙の孤独と大衆一如の行持。

「ここに来るのを楽しみにしているんです。」と話す人が多く、中川老師が普門寺を「こころの故郷」と言う所以に納得がいきました。

中川老師のドイツにおける国際布教については、拙ブログで紹介していくうと思っております。ぜひご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/zensuru365/>



中川正壽老師(左)とお弟子さんの正然さん(右)

… 国内レポート …

大恩の師 旅立ち

追悼 初代SOTO禅インターナショナル会長 松永然道老師

永井成典（愛知県宝珠寺住職）

桜の花を見る前の、平成29年2月24日に遷化されました。贈本山西堂宗徳世一世重興大満然道大和尚の思い出を少しもとき、追悼の文を記したいと思います。

そっと瞼を閉じて。又見開きしてみると、44年の月日のアッと過ぎし思いに驚きを隠せないのでした。

小生、永井成典が開教師の辞令を受けて渡米したのが25歳の時でした。当時ロサンゼルス禪宗寺別院には山下顯光總監、松永然道開教師の先生方が駐在していました。今でも覚えています。夕方ロサンゼルス空港に到着。禪宗寺の役員の方の迎えをいただき、夜の7時頃禪宗寺に着いたのですが、葬式の最中で、山下總監も松永先生も葬式に出席していたので、終わってから御挨拶したのです。会葬者が沢山あって、人の多さにビックリしたものです。

それから二人の先生方は長髪で、七三に髪を伸ばしていましたのでビックリ。後日分かったのですが、ロサンゼルスの僧侶のスタイルは背広とネクタイが普通の生活姿という。そのジェントルマンぶりには驚きました。特に松永先生はダンディーな先生という印象でした。

松永先生は奥様(道代さん)、長男(寛道師)、長女(英絵さん)の4人家族で、小生とは13歳違いの38歳であったと思います。何しろその頃の別院禪宗寺には本堂建立の時からの借金があって、開教師の給料は安く、独り者である小生は確かに150ドルだったのですから、松永先生は500ドルもなかったと思いますよ。4人家族で食べていく事は大変だったと思います。ですから奥様も仕事を持つて苦労されて頑張っていた事を覚えていました。

そんな苦労を見て応援し助けて下さったのが、禪宗寺の役員とメンバー。当時の役員、理事長阿部庄司ファミリーの多大なる物心の御援助をいただいていた事は忘れる事は出来ません。子どもさんの学校の迎えと夫妻の仕事が終わるまでのバビーシッター。家族同様の御支援を受け生



44年前禪宗寺事務所にて松永然道先生(右)、永井成典先生(左)

活していた事。メンバーの皆様は開教師の先生をよく可愛がって下さいました。

そして、禪宗寺には他の宗派の開教師の先生方がよく集まって情報交換をしていました。それは山下總監、松永先生の人柄でしょう。西本願寺・東本願寺・淨土宗・高野山・日蓮宗、各宗派の先生方が月に何回も顔を見せに来っていましたね。禪宗寺は仏教連合会のたまり場であったのでしょうか。松永先生は個人的な付き合いも多く、夜はピアノバーでも交流をして、各宗派の先生から信頼が厚かったのでいろいろな行事を計画実行していました。

思えば、ちょうどベトナム戦争の終戦で、アメリカがベトナム難民を受け入れた時、カリフォルニアにも沢山のポートビープルの収容所キャンプがありました。その時ベトナムの仏教徒の皆様に少しでも物心の支援をと立ち上がり、日本人仏教連合会の先生方が、キャンプ地に行って交流して、セレモニー(礼拝・法話)、救援物資を提供する人道的な役目を一心に、松永先生が責任者として行動していましたことが思い出されます。

思い出は…少しずつ甦ります。その時の開教師であった一部の各宗派の先生方が私の寺に十年ほど前に集合した写真があります(下の右)。日本へ帰国して何十年ぶりの再会でしたので、松永御夫妻もとても喜んで楽しい時間を過ごして、夜遅くまでロサンゼルスの開教師時代の話に花が咲きました。とっても幸せな時間でした。

松永先生の御子息(寛道師)は後住を立派に務めて後継者として何の心配も無き事を報告いたしますので、松永御夫妻様どうぞ御安心して下さい。

感謝の心を込めて合掌いたし、追悼文とさせていただきます。

アメリカ禪宗寺別院元開教師 永井成典百拜



前列右より秉元婦人、秉元先生(西本願寺)、松永先生、松永道代夫人、後列右より永井佳代夫人、今村先生(高野山)、永井成典先生、麻谷先生(淨土宗)

海外徒弟(子弟)研修会報告

SZI主催 2016年 第2回 海外徒弟(子弟)研修会 in ハワイ報告

—— 人の触れ合いとハワイの文化との触れ合いの中で学んだこと

引率者 大山 健治 (山形県清龍寺副住職)

SOTO禅インターナショナル主催の第2回海外徒弟(子弟)研修会について、一昨年の開催ではありますが改めましてご報告いたします。今回は5人の子どもたちと私が引率として参加し、昨年(2016年)の12月23日から28日までの6日間、ホノルルにある曹洞宗ハワイ別院正法寺にお世話になりましたが研修を行いました。「人の触れ合い」そして「お寺やお坊さんのコミュニティーの中での役目」などについて学べたのではないかと思います。

研修では大勢の方々と出会い大変お世話になりましたが、特にクリスマスの時期だということもありホームパーティーに招待され、地元の料理を食べたり英語で会話をしたり、様々なゲームを楽しんだりしました。最初は緊張していた子どもたちもだんだん慣れて来て、短い間に地元の人と心がどんどん通じ合うようになったと感じました。ハワイには「アロハ」という言葉がありますが、これは「こんにちは」「ありがとう」「いらっしゃい」「おもてなしの心」など、いろいろな意味がある言葉です。今回、私たちはこのアロハスピリットの大きな愛情と友情で包み込まれたと思います。それから「オハナ」という言葉もあります。これは「家族」という意味ですが、血縁で繋がっている家族のことだけではなく、もっと大きな意味にもとらえることが出来て、ハワイではサンガのことをオハナで表現をすることもあります。今回5人の子どもたちと初めて出会ったある方には、「新しい友達ができる嬉しい、またオハナが広がったので感謝するよ」と言われました。

またハワイプランテーションビレッジという博物館では、100年以上前日本からハワイに移民した大変な時代を生き抜いた人々の生活を知ることが出来ました。そして、いろいろなお寺や禅センターを訪れたのですが、ハワイでは厳しい状況にある少数派である仏教の布教師、寺族、そして檀家さんが力を合わせてお寺の維持のために様々な活動や工夫をしていることを知りました。どのお寺にも大きなホールがあり、そこで様々なアクティビティー、サークル、習い事が行われていました。その他に日曜礼拝と日曜学校をやっているお寺もあって、私たちが参拝した日に丁度餅つきの準備をしているお寺もありました。そして各お寺には墓地ではなく、納骨堂がありました。お寺は葬式と法事をする場所ではもちろんありますが、人が集まる場所でもあるということを実感しました。

この度の研修旅行では大勢の方々に大変お世話になりました。ハワイ別院正法寺をはじめ関係各位には心よりの感謝を申し上げます。この経験と思い出が子どもたちにとって大切な財産になり、これから的人生に役立つことを願っています。

なお、海外徒弟(子弟)研修会は本年度も12月23日(土)より29日(金)まで引き続きハワイにて開催されることになっています。



開会式

勉強のためにクリスマスの日にカトリック教会に行つてミサにも参加しました。他宗教の人が仏教の法要に参加した時はどんな気持ちなのか、初めてお経を聞いたり、お焼香することに対してどのように感じているのかを考えさせられました。生まれてから気付けば曹洞宗のお坊さんの子どもとして育っている私とは全く違う環境・文化・宗教で育った人との考え方と価値観は私とはかなり違うのだと思いました。

翌日 Hawaii Herald というハワイの日系人の新聞会社から取材がありました。子どもたちには「研修の目的は?」「ハワイで食べたもので何が美味しかったか?」などのほか、とても難しい質問がありました。「いろいろな宗教や文化が世界にあり、戦争や争いが絶えないですがどのようにすればみんなが仲良く暮らせるのでしょうか?」という質問に対し「他の人の文化や宗教を経験し合えば、もっと理解力が生まれ、もっと仲良くなれるのではないか」という返事がありました。この返事に対し取材していた方は大変感動していました。海外研修によって子どもたちの世界観が変わっていくのを感じる瞬間でした。

この度の研修旅行では大勢の方々に大変お世話になりました。ハワイ別院正法寺をはじめ関係各位には心よりの感謝を申し上げます。この経験と思い出が子どもたちにとって大切な財産になり、これから的人生に役立つことを願っています。

なお、海外徒弟(子弟)研修会は本年度も12月23日(土)より29日(金)まで引き続きハワイにて開催されることになっています。



ケアホームを訪問



パロ口禪堂で坐禅



ワイキキの教会のミサを見学しました



アイエア太平寺のメンバー、藤川家の法要。駒形修二師と

▶ 昨年の徒弟研修参加者の感想文 (カッコ内の学年は当時のものです)

二〇一六年十一月に開催されたSZI主催海外徒弟研修に参加させていただきました。私は二〇一五年北アメリカで開催された徒弟研修に引き続き二回目の参加でしたが、同じく二回目参加の徒弟も何人かいましたので、研修旅行がとても楽しみでした。
成田空港で結団式があり、引率の大山先生からの説明と注意事項の確認、参加の皆さんのお自己紹介を行いました。
ハワイに到着後、別院の先生に送迎いただき、正法寺に到着。正法寺で私たちちはハワイにおける布教の特徴と先生方が工夫されていることについて話を伺いました。ハワイというアメリカの文化圏で仏教が受け入れられるためには、日本の仏教よりもインンド的な要素のはいった仏教スタイルのほうが受け入れられやすいこと、畳に正座をするスタイルではなく、靴を履いたまま椅子に座って法要に参加できる方が良いこと、教会のように日曜ごとにお参りがあったり、お寺でクラブ活動など、皆が楽しんで集まる行事が組んであることなど、どれも新鮮なものでした。
また、ガーラの講習も受けましたが日本でなじんでいる梅花と違つて、主旋律と副旋律に分かれしており、まるで贊美歌のようになつていて、これも教会を意識した結果なのかなと感じました。
ハワイで布教活動をされてきた方々が、現地の人々にそれぞれの時代ごとに心から受け入れられるように、百年という長い年月をかけて築いてきた仏教なんだということが伺われました。そして、それは今もなお、信徒さんとともに「ハワイの仏教」を育てていて見えてきました。
大山先生や現地の先生方が、ぼくのちょっとした仏教に関する質問に対して、とても熱心に語つてくださったことが、とても印象的で嬉しいことでもありました。
今回の研修では、ハワイ総監部の先生方、メンバーの皆様方、SZIの方々などとても多くの皆様にお世話になり、多くのおもてなしをいただきました。ここに心からお礼申し上げますとともに、海外での徒弟研修の意義を中心刻んで一生大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。

龜野 哲舟 (高校 2年)

田富 悠太（高校一年）

ハワイで五日間の研修をし、とても良い経験をさせてもらいました。そのうち二つの経験について述べます。

一つは「交流」です。毎晩パーティーに招かれ、ゲームや会話をし、とても楽しく過ごしました。三日目の夜、正法寺住職の駒形宗彦先生に関わるお寺や檀家さんなどたくさんの方々とのパーティーに参加しましたが、あまり周りの方々と会話を自分からすることはできませんでした。英語あまり話すことができないこともありました。しかし頑張って自分から進んで会話をすることが大切だということを感じました。交流は僧侶になるためには必要だと思いました。

二つ目は「文化の融合」です。二日目にブランチショニビレッジという所を訪れました。昔多くの国の人々がハワイに移民としてやって来たことがわかりました。そこで七ヶ国について詳しく、ガイドのカズ子さんから紹介して頂きました。韓国・中国・日本・沖縄・フィリピン・ポルトガル・ペルトリコの家や生活、文化を紹介してもらいました。いろんな問題を乗り越えて、今のハワイの暮らしがあることを学びました。有名な楽器ウクレレはボルトガルから持ち込まれました。もともとの名は「ラギーニャ」です。また、韓国では昔一歳を迎える赤ちゃんが少なかつたため今のハワイでは、一歳の誕生日を盛大に祝う習慣が広がりました。このほかにもハワイではそれぞれの国々の文化が融合している事が分かりました。

私はハワイに生まれ三歳まで過ごしました。父はコナ大福寺で十六年間住職を務め、祖父はアイエア太平寺の住職を六年間務めました。今回の研修でオアフ島のことを少し理解し、将来は私もハワイで僧侶として仕事をしたいと思いました。ハワイでお世話をした方々の温かさ、自然の美しさと壮大さ、そしてハワイの文化が私にとってとても魅力的だったからです。

福島慶悦（中学三年）

今回のハワイでの研修ではハワイにあるお寺とその歴史、そして移民などのことについて学ぶことができました。

まず、ハワイのお寺は、日本とは違つて独特な形をしていました。この形はインドのお寺の形をまねてつくったそうです。お寺の中は教会のように横長の椅子が並べられていました。このように、ハワイのお寺では現地の人になじめるように工夫をして作っているそうです。このようにお寺の歴史や形というものを見ることができ、「日本とは違うお寺」を学べてとても良い経験ができました。

次にハワイでは多くの人とふれ合う機会がありました。毎日のようにパーティに招待され、そこでクリスマスのプレゼント交換やクリスマスのかざりつけをした家などといった人だけではなく、キリスト教のクリスマスのイベントにも参加し、経験することができ、とても貴重な体験をすることができました。パーティーもそうですが、僕は特に教会のクリスマスミサを見に行けたことが印象に残りました。大きな教会にあふれるほとんどの人たちがいました。そこでは歌を歌つたり牧師さんの話を聞いたりと仏教の法要などは違う新しい体験でした。また、クリスマスパーティーでは食事はピューフェスタイルで、お肉やアヒボケ、そして巻き寿司などがあり、とてもおいしかったです。プレゼント交換ではさまざまな物があり、中にはスター・バックスのギフトカードとマグカップや、十ドル札といったおもしろいプレゼントばかりでとても楽しかったです。

このような日本ではできないような貴重な体験ができる今回研修はとても良かったです。このような経験ができたのはこの研修を準備してくれた人大山先生、そして別院正法寺のみなさんの協力、そしてサポートがあったからだと思います。このことをあたりまえと思わず感謝することが大事だと思います。今はハワイでの研修でサンフランシスコとはまた違ったお寺と体验ができた一週間でした。

淺井 怜衣（高校一年）

昨年に続きSOTO禅インターナショナル主催海外徒歩研修会に参加させて頂きました。今回は全ての日程でホノルルにある曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺にて研修を行い、ハイでの生きた仏教に触れる機会を得ました。

ハワイには多くの日系の方が住んでいらっしゃる影響が曹洞宗のみならず他宗の寺院も多く見られ、研修の一環としてその中の幾つかに足を運びました。寺院といつても日本のようではなく、外観や内装が教会のようであつたりあるいは白一色であつたりしたので、最初は日本のお寺との大きな違いに戸惑いを感じました。例えばほぼ全ての寺院で本堂は骨ではなく絨毯です。教会のような長いが置いてあるところもありました。そのため、初めてそのような洋風のお寺を訪れたとき、私はそれが寺院であるとは思えませんでした。ところがあるお寺で「海外は文化が違うので、日本の文化の押しつけだけでは現地では受け入れてもられない」というお話を聞いて、私の中にあつたかつてのお寺のイメージが崩れ、お寺の在り方の多様性に気づくことが出来ました。例えば、よく考えてみたら骨敷きであつたら、年中高温多湿の環境ではカビてしまうかもしれないし、お寺でお参りするのに正座は必ずしも必要ではないと思います。私の中で知らず知らずのうちに「お寺はこうあるべき」という固定観念が生まれていたことを痛感しました。

今回の研修では檀家さんのご自宅に招かれ、法事に参加する機会もありました。参列者はハワイらしいカラフルな服装で、特に正座をするわけでもないけれど熱心に遺影に手を合わせていました。またある寺院の本堂にはレイが掛けられている仏像がありました。それらに触れ信仰において「形式」というものは最重要事項ではなくそこにある想いこそが大切であるということ、そして、表現の方法は違つても本質は同じであるということを学ぶことができました。

研修の後半に現地の雑誌の取材を受けましたが、その質問の中に「世界の人がいろんな文化や宗教で戦つたりするが、どうすれば分かりあって仲良く暮らせるか?」というものがありました。同じ仏教でも文化が違えばその形は全く違います。しかし私はハワイで異なる文化が融合し共存している姿を目の当たりにして、「これはこうあるべき」という偏った概念に縛られることなく、それぞれの文化を尊重する姿勢が大事なのではないか、という考えに至りました。

今回の研修で引率をして下さった大山先生、現地でお世話になった駒形総監を始めとした現地の先生方に心から感謝致します。

池田楓子（中学一年）

私は、海外に行くのが初めてで、少し不安でしたが、大山先生や、海外に何度も行ったことがあるという他の参加者の方達もいて安心しました。

まず、ハワイに到着してからは、日本とは全く違う町並みや建物を見てやつとハワイに来ただんだという実感がわきました。別院に着いたらまず、日本のお寺との建物の違いに驚きました。建物のすべてが白く、全くお寺という感じがしませんでした。中に入つたら日本のお寺との共通点がたくさんありました。でも違うところもたくさんあって一つ一つに驚きました。また、天台宗の別院も民家からお寺を建てたとは思えない立派な本堂で驚きました。二日目に行ったハワイブランチショニビレッジではどのようにしてハワイの文化が生まれたのかがよく分かりました。また白石家のクリスマスパーティーでは少し英語に慣れてきて簡単な英語での会話が出来ました。

三日日の朝に行つたクリスマスミサでは、初めて見たり、体験することばかりだったので良い経験が出来たと思います。その後に、ワイキキビーチに行つて少し遊びました。日本ではなかなか見られないきれいな海で感動しました。

五日目では、イオラニ宮殿ツアーガ出発なくて残念でしたが前日に行けなかつたダイヤモンドヘッドに登れたのでよかったです。頂上から見た景色はとてもきれいでまた登りたいと思いました。

日本人として嬉しく思いました。最後の夜ご飯は、別院の方達と食べて、ゲームなどもして楽しかったです。帰る日は、もう少しハワイにいたいという気持ちとはやく日本に帰りたいという気持ちでした。別院の方達には大変お世話になつたので、しっかりと感謝の気持ちを伝えました。

今回の研修で、日本とハワイの共通点や違うところをたくさん見つけられたのでよかったです。また貴重な体験や見たもの、感じたもの、会つた人など絶対に忘れないようしたいです。また今回学んだことをこれからの生活に生かしていきたいです。

